

フロム'09  
立ち読み版

常盤隆一

フロム'C'

いつもはかたく三つ編みにされている髪が解かれている。ウェーブのかかった黒髪は動きに合わせて乱れている。時々、その髪が赤く薄い唇にくっついて、その度に細く白い指がそれを払う。

僕は自分に跨っている彼女、大橋真美をぼんやりと見ていた。クラスメイトの大橋は絵に描いたような真面目な優等生で、担任の大のお気に入りだ。

今時あり得ないくらいの野暮ったいぶかぶかの制服、二つのかたい三つ編み、太い銀縁の眼鏡。おまけにクラスで口をきくのは授業の時くらい。誰とも雑談をしているのを見たことがないし、同じクラス委員の僕だって必要最低限の会話しかしたことがない。その口調は真面目そのもの、しかも同級生なのに敬語で喋るから余計に親しみにくい。

それがさっきまでの僕が抱いていた大橋の

イメージだった。だから大橋に家に誘われた時も何か用事があるのだと当然のように考えていた。きっと担任から頼まれた書類か何かを渡されるのだろう。そんな風に思っていた。

でも、大橋は僕を家に上げて部屋に招いた後、急に髪を解き始めた。大橋の趣味なのか、アロマテラピーとかいうやつなのか、部屋には甘い香りが漂っていた。その香りを吸い込むと妙に心地良くなったから、効果があるのは確かだ。が、その香りを嗅いだら、心地の良さと共に変な切迫感のようなものに襲われた。早い話が下半身、つまり僕のペニスが急に元気になってしまったのだ。

髪を解いて眼鏡を外した大橋が、当たり前のような顔をしてショーツを取る。気付いたら僕はベッドに押し倒されていた。

しかもここが僕の家のおすぐ近くなんだから、変な話だ。なんと大橋の家は僕と同じマンションにあった。しかも同じ階層だ。なのに僕はここに来るまで、大橋が同じマンショ

ンに住んでいるということを全く知らなかった。

いくら大型マンションだからって、同じ学校で同じ時間くらいに登校しているはずなのに、一度も会わないなんてあり得ない。エレベーターは数基設置されているけれど、エレベーターホールは一つしかない。なのに見かけたことがただの一度もないのだ。

しかも大橋の家は僕の家隣の隣だった。間に一軒、別の家族の家を挟んでいるだけなのだ。これで一度も会わないなんて偶然にしては出来すぎている気がする。

「有田くん。もしかして、気持ち良くない？」

それまで腰をくねらせていた大橋が急に不安そうな顔になって言う。僕は微かに笑って首を振った。大橋がこんな風に砕けた口調で話しかけてくれることも驚きだが、それを隠して無難に返答する。

「ううん。凄く気持ちいいよ」

でもほら。男ってあんまり態度に出ないっていうか。そんな言葉を付け足して僕は照れくささを装う。

僕、有田冬司は大橋と同じとまではいかななくても、学校では優等生のフリをしている。その理由は有田、といえればかなりの大企業で、しかも僕がその会長の御曹司、だからだ。自分では大したことだと思っただけではないけど、他人はそうは思わないらしい。だから正体が割れているところでは僕は大人しく優等生を演じることにしている。

でも実は外ではけっこう遊んでいる。自慢じゃないけど自由に出来る小遣いは、クラスメイトたちのそれとは桁が二つ以上違うし、性的なことにももちろん興味がある。おまけに僕の容姿はかなり整っている部類に入る。だから実は女性とベッドインするのは慣れている方だ。

「良かった……」

大橋がほっとしたような顔をする。どうやら僕の反応がかなり気に掛かるらしい。安堵の表情は本物に見える。

「もっと気持ちよくしてあげるから」

一転して艶やかな笑みを浮かべ、大橋が制服の上から左の胸に右手を伸ばす。そしてスカート越しに股間に添えた手が何かを弄くる。……位置的に多分、クリトリスを弄っているのだろう。

大橋の艶やかな表情にどきりとしつつも、僕はじっとその様子を観察していた。制服の上からでもはっきり判るほどに乳首は勃起している。これが夏服のブラウスなら話も判らなくもない。

でも今は冬だ。ブレザーの上からでも大橋の乳首はぽっちりと浮いて見える。相当に昂奮しているのか、それとも乳首がかなり大き

い方なのだろうか。好みとしては乳輪が大きすぎるのはタイプじゃないんだけど。

そんなことを考えていると、急にペニスが膣壁に締め付けられた。思わず呻きが漏れる。しかもまるで僕の性感帯を探るかのように、付け根から先端に向かって波打つようなゆっくりとした動きが加わっている。

一体、どんな訓練をしたらここまで膣を動かせるのだろうか。そういえば挿入の時もそうだった。僕のがちがちに勃起したペニスが晒され、大橋が跨って腰を落とした時、膣は驚くほどに緩かった。なのに大橋が艶っぽく笑って胸を弄って腰をくねらせた途端、ペニスにぴったりとフィットするように膣壁がいきなり絡みついてきたのだ。

「あん！ あああんっ！」

可愛い声で喘いでいるんだけど、僕は  
大橋の喘ぎ方にも疑問を覚えていた。最初は可愛い声だなあ、と思ったものの、その声はや

けに単調で、しかも僕のことをちらちらと伺っているのだ。僕は気付かないフリをしているけど、どう考えても演技だということが判る。

まあ、僕がリードしている場面で演技だと判ったらちょっと落ち込むけど、大橋から誘ってきたんだからこれもありかな。そんなことを思いつつ、僕はスカートの中に手を入れようとした。けど、大橋がその手をさりげなく退ける。

これで三度目。僕は心の中でカウントした。大橋は僕から触ろうとすると何故かこんな風に拒んでみせるのだ。

「触られるのは嫌い？」

三度目なら訊いても違和感はないだろう。そう考えて僕はそう訊ねてみた。すると大橋の喘ぎ声がぴたっと止まる。

「え、あの！」



突然の質問に驚いたのか、大橋が困惑した顔で口ごもる。かなり予想外の質問だったみたいだ。でもセックスの最中に相手の身体に触るのは自然だと思う。そんな風に返してもいいんだけど、僕は別の答えをチョイスした。

「身体に触ってみたいんだけど、駄目かな？」

三度も避けたのだ。きっと触られたくない理由があるに違いない。そうは思ったけど僕はあえてそのことに気付かないフリをした。

「有田くんが、そう言うなら……」

ちょっとためらうような顔をして、大橋が僕の右手首をつかむ。その手を左胸にぐい、と押しつけられる。

……確かに触りたいとは言ったけど、この握力ってちょっと変じゃないかな。僕の手をつかんでる大橋の手は、どう考えても女の子の握力じゃなかった。まるで柔道部の友だち

に腕を引っ張られた感じがする。しかもおまけに押しつけられた胸の感触は、予想とかなり違っていた。

ふわふわすぎるのだ。女の子の胸を触っている、というよりはクッションみたいなものを触っている感じがする。しかも真ん中にぽっちりと浮いている乳首はかたく、そこだけ全く作りが違ふような感じすらある。

「ふわふわしてるね」

他に言いようがなく、僕はストレートに感想を述べた。しかも重力を無視したこの形って、普通はあり得ないんじゃないだろうか。そんな風に思えるほど、大橋の胸の形は理想的なお椀型だった。ボリュームはあるから多分、Cカップ以上。なのに重力を無視したお椀型なのだ。

「んっ！ ああんっ！ 有田くんっ……」

相変わらず喘ぎ方は演技っぽいけど、大橋

の表情は何だか嬉しそうだ。何でかな、と考えた僕は大橋の膣の動きがぴたりと止まっていることに気付いた。

うん、やっぱり変だ。

胸の感触もそうだし、握力もそうだし、とにかく色々な事が変だ。大橋は少なくともこれまで僕が触れてきた女性とは全く違う。胸もパットの感触と違ってるとし、別の詰め物をしているならあの乳首の位置はあり得ない。握力だっておかしい。それに大橋って妙に冷静に僕のことを観察している気がする。

思いついて僕は腰をいきなり突き上げてみた。大橋のリードで膣壁に擦られていたペニスが、勢いよく膣の奥に到達する。その瞬間、何かがペニスの先に嵌ったような感じがした。

「きゃっ！ あふっ！」

それまでと全く違う、単調じゃない本気っ

ぽい声が大橋の口から漏れる。うっとりするような顔をしているから、多分本当に感じたんだと思う。でもすぐに大橋は我に返ったような顔をして、しきりにスカート越しに股間に添えた手を忙しなく動かし始めた。

僕はベッドに腰を戻して大橋の観察を続けた。膣の奥深くに嵌っていたペニスの先端が、まるでキャップみたいなものからすぽんと抜けるような感触がある。

やっぱり変。僕の疑いはどんどん深くなっていった。確かに女性用の避妊具があると聞いたことはある。男のペニスに被せる、いわゆるコンドームじゃなくて膣の中に装着するものらしい。もしかしてそれかな、とは思ってたんだけど、いくら何でも亀頭部分にすっぽりとはまり込むようなキャップの形はしていないと思う。

僕がそう考えた理由は、大橋の膣に挿入する前に忠告をしたからだ。リスクを回避するため、避妊するのは当然だ。なのに大橋はし

なくていいとあっさりと言った。だからてっきり大橋の側がしっかり避妊をしているのだと思ったのだ。

その大橋は僕にじっと観察されているということにも気付いていないのか、股間を懸命に弄っている。真剣な顔つきでスカート越しにクリトリスを弄る女性なんて見たことがない。大橋の真剣そのものの表情も変だが、指の動きもかなりおかしい。快感を引き出すためとか、男に見せるためというような感じではない。例えるならゲームのコントローラーを操作しているような感じなのだ。

これはいくらなんでもおかしすぎる。

そうは思ったけど僕は黙っていた。大橋が変だということは判った。でもセックスは嫌いじゃないし、そんな大橋を僕は面白いと思い始めていた。あの優等生そのものの姿とのギャップも面白いが、それだけではなくて大橋自体を面白いと感じる。

「そろそろ、出るかも」

一応、予告してみる。するとそれまで真剣に股間を弄っていた大橋がはっとしたように顔を上げた。慌てたように深く腰を落とす。

「有田くん……来てっ！」

ぎゅっと目を閉じた大橋の表情からは、それまでの妖艶さは嘘のように消え去り、まるで処女かのように緊張が滲んだ。そのことに僕は新鮮さとたまらないものを感じて言われるままに射精した。

さっきと同じように亀頭の部分はキャップみたいなものに嵌め込まれている。その中に射精しているはずなのに、何故か精液は溢れてこない。それどころかどこかに吸い込まれている感じすらある。まるで掃除機みたいだ、と思った時、僕の耳は微かなモーター音を捉えていた。

音源は目の前の大橋の腹部ではないだろう

か。ぎゅっと身を縮めている大橋の腹からごく微かに音が漏れているのだ。さらにモーターが回転する際に発生する軽い振動をペニスに感じる。

「有田くんの、一杯出てる……」

うっとりした表情で大橋が呟く。

「気持ち良くて、たくさん出たみたいだ」

僕は観察して感じたことを隠し、照れくささを装ってそんな風に返事した。

もしかしてどれだけ出したか正確な量が判るんじゃないの？

そう訊きたいのを我慢した。どんなに鈍くても腹部から聞こえたモーター音で気付くはずだ。

どう考えても大橋は普通じゃない。しかも多分、腹部に機械が入っている。でも僕の予

想は腹部だけじゃなく、他のところも作り物なんじゃないかというところまで発展していた。

このご時世だ。人にそっくりなラブドールだって販売されている。質感もよく似た、女性型の大型オナホールだって売られている。人にそっくりな女性型の人形、というだけなら商品化は実現しているのだ。

だがそれらは自らは動かない。使用者がポーズをつけたりすることは可能だが、あくまでも人形であってロボットではない。最初から内部に音を仕込んでおけば、喘ぎ声くらいは流すことは可能だろうが、人の動きをなぞることの出来るラブドールなんて聞いたことがない。

「あ、また、大きくなって来てる」

大橋が何故かほっとしたような表情で呟く。確かに僕のペニスはかなりの量の精液を出したはずなのに、大橋の膣の中で元気を取



り戻しつつあった。

まるで思考と下半身が完全に分離しているみたいだ。目で観察し、そのことについて冷静に考えられるのに、心のどこかで焦りのようなものを感じている。とにかくセックスしたくてたまらないと身体が訴えているような気がするのだ。僕はそのことを不思議に思いつつ、大橋の様子を伺っていた。

「有田くん、もっとしたいわよね？」

ゆっくりとした口調で大橋が問い掛けてくる。まるで僕がどういう状況にあるかを判っていて、そのことを改めて確認しているような言い方だ。

「うん、そうだね」

欲情しているのももちろんだけど、もっと大橋のことが知りたい。僕はその欲求から素直に返事した。

「有田くんを、もっと気持ちよくさせてあげる」

大橋がまた艶っぽい笑みを浮かべて右手を左胸に添える。僕はその様子をじっと観察した。制服の上から乳首をつまんで捻っている。すると僕のペニスをしっかりとくるんでいた膣が緩む。

もしかしてスイッチみたいなもの？

考えてみると大橋が乳首やクリトリスを弄るたびに何かが起きている。例えば膣がぎゅっと締まった時もそうだった。膣壁全体が波打つような動きをし始めた時も、僕の出した精液を吸い込んだ時も、必ずその前に大橋は乳首やクリトリスを弄っていた。

これはあくまでも仮説だけど、大橋の乳首やクリトリスは何かのスイッチになっているのではないだろうか。

膣が緩んだ後、大橋が腰を浮かせる。

「有田くん、始めるわよ」

そう宣言した大橋が腰を揺らしながら、乳首をさっきとは逆の方向に捻る。すると僕のペニスの先端までを咥え込んでいた大橋の膣がぎゅっと締まった。そのまま大橋が腰をゆっくりと焦らすように下ろす。それに合わせて僕のペニスは締まった膣壁に強く擦られた。

それだけじゃない。大橋が今度はつまんだ乳首を上下左右にずらしたのだ。するとそれと連動するかのように膣がうねり始めた。

刺激としてはかなり強い。はっきり言えばもの凄く気持ちいい。あまりの心地の良さにくれ声がついつい漏れてしまう。でも僕は、大橋の様子を見逃すまいと、はっきりと目を開いて観察を続けていた。

さすがにこの膣の動きは、どんな訓練を受けた女性でも無理だと思う。ペニスを咥え込

んだ大橋の膣はまるで波のよううねっているのだ。しかもペニスの根元から先端、大橋からすると膣口から膣奥に向かって規則正しい間隔でうねっている。

大橋は僕のことをちらちらと観察している。気持ちの良さに呻きを漏らしたりすると嬉しそうにうっとり微笑むのは、きっと演技じゃないと思う。それにさっきまで出していた演技っぽい喘ぎ声はもう出していない。たまに微かに声が漏れているのは、僕と同じように感じているからなのかも知れない。

お互いに観察し合っているというのも変な話だけど、僕はそのことを面白いと感じていた。今までこんな女性とセックスしたこともないし、話にも聞いたことがない。大橋が乳首を弄る手つきも、さっきの時は愛撫に見せかける努力をしていたみたいだけど、今は乳房をぎゅっと握って乳首を弄って見せたりはしていない。あくまでも乳首のみをつまんで捻ったり、倒したりしている。

それと他にも大橋には変化があった。最初のセックスの時にはしていなかった、射精した時に聞こえたあの音がずっと続いているのだ。音がしているのは大橋の下腹部。もっと細かくいえば膣の奥あたりだと思う。

そういえば小さい頃に遊びに使っていた玩具って、モーターの歯車がずれてこんな音を立てていた気がする。

僕は擦れる膣の気持ちの良さを味わいつつも、そんなことを思い出していた。もしかして僕が腰を突き上げたあの時、歯車がずれたのではないだろうか。……あくまでも僕の仮説が正しければ、の話だけど。

僕はただ、だらりと四肢をベッドに投げ出してされるがままになっている。大橋の方は異音が鳴っていることには気付いていないようだ。

「有田くん。どう？ もっと、気持ちよくなりたい？」

考えに耽っていた僕は大橋の言葉で我に返った。いけない。ついぼんやりしてしまったらしい。でも僕のペニスは大橋に与えられる刺激に反応し、意識していないのにびくびくと動いている。

僕の顔を覗き込んだ大橋と目が合う。もっと、ということはこれ以上の何かをやってくれるということだろうか。少しの間だけ迷ったが、僕は大人しく大橋の問い掛けに頷いた。

これまで右ばかり弄っていた大橋の指が、左の胸にかかる。おもむろに伸ばした指を大橋はやけに慎重につまんで捻った。その直後、ペニスを咥え込んだ膣がゆっくりと振動し始める。

その刺激に思わず呻いた僕だったが、観察はしっかりしていた。いくら何でもこれは、訓練などで会得した動きではない。まるでバイブレーターのような動きなのだ。しかも大橋が乳首を少し捻っただけで振動が強くな

る。

どう考えてもこれは、乳首と膣が連動している。しかも大橋の真剣な表情を見る限り、振動の調整はかなり難しいようだ。

「これ、は、すごい、ね」

ペニスの方で感じていることを正直に言った僕の声は、無意識に途切れ途切れになった。身体と頭が乖離しているような感じがする。昂奮状態に陥っているせいか息も荒くなっているから、上手く喋ることが出来ない。なのに頭の方ははっきりしていて、大橋の様子をつぶさに観察出来るのだ。

こんな経験は初めてだ。これまでも女性の姿を観察しながらのセックスはしていたけど、ここまで身体の反応と思考が乖離したことはない。そんな風に考えた僕は深く息を吸い込んでみた。

甘く漂う香りがこの原因なんじゃないだろ

うか。アロマセラピーに使うごく一般的な商品などではなく、これがもし催淫剤だとしたら。

そんなことを考えていた僕は、目に入った大橋の表情に困惑した。何故か大橋は怯えたような顔をしているのだ。

「有田くん？」

「え、なに？」

反射的に答えてしまってから、僕はまずいということに気が付いた。もしかして急に大橋が怯えたのは、僕の反応がおかしかったからではないのだろうか。いや、おかしいというよりは、大橋の予想外の反応だったに違いない。

ということはつまり、大橋の予定では僕はこの時点で返答をしてはいけなかったのではないだろうか。でも一度出してしまった言葉は元には戻らない。



「あ、ああんっ！ 有田くん！ キスしたいの！」

突然、大橋が演技っぽい喘ぎ声を出す。それまで怯えていた表情が一変し、妖艶な表情が戻ってくる。どうやら僕が正気だということが計算外だったらしい。

かといって、どこかに意識を飛ばしている演技なんて出来ないし。というか、そんなことになったことないし。

僕はどんなに気持ちのいいセックスの最中でも、理性を飛ばして獣のように襲いかかったりするタイプじゃない。どっちかと言えば乱れる女性を観察して楽しむタイプだ。だから欲望のままに女性を組み伏せたりもしたことがない。

困ったな。そう思いながら僕は大橋の様子を観察していた。大橋はクリトリスを忙しなく弄り始めている。ここでキスを拒むつもりはないけれど、急に迫ってきた理由が判らな

い。

そんなことを考えている間に大橋が身体を倒して抱きついてくる。されるがままに唇を塞がれた直後、口の中に甘ったるい液体が入ってきた。液体の匂いは強いが、部屋に漂っているものと同じ香りがする。

さすがにこんな唾液を出す女性はいないだろう。しかもキスの直前に大橋はクリトリスを弄り回していた。どういう理屈か判らないが、クリトリスを弄ることによって甘い液体を出したのだろう。つまり大橋は意図的に僕にこの甘い液体を飲ませようとしているのだ。

冗談。飲んだら観察出来なくなるじゃないか。

幸い液体の量は少なかったし、僕はそれを飲むフリをするだけに留め、唇が離れた直後、大橋の首筋に舌を這わせつつ液体を吐き出した。

「あっ！ 有田くんっ！ 駄目っ！」

びくびくっと大橋が震えて仰け反る。僕はびくん、と反り返りかけた大橋の背を捕まえ、今度は大橋の髪をかき上げて耳から首筋にかけてゆっくりと舐めてみた。

間違いはない。大橋の肌は驚くほど滑らかだった。いや、滑らかという表現では足りない。あまりにもつるつる過ぎるのだ。どれだけエステに凝っていても、ここまでつるつるの肌になるとは思えない。それに質感が人肌とは違う気がするのだ。しかも多少はあるはずの塩分が全く感じられない。

「有田くん！ お願い、やめて！」

慌てたように言って大橋が腰を上げて立ち上がろうとする。でもそれより早く、僕は大橋の腰を捕まえていた。動こうとした大橋が僕の腕に引かれて胸に倒れ込んでくる。

これは無言の方がいいんだろうか。その方があの液体のせいだと思ってもらえるかも知れない。そんな風に考えて、僕は嫌がる大橋の身体を片腕に抱きしめ、片手で細いネクタイの結び目に指をかけた。するりとネクタイを抜いた後、ブラウスのボタンを一つだけ外して首の根元にキスをする。

「あっ！ んふっ！ 有田くんっ！」

身体を震わせ、大橋が掠れた声を漏らす。感じているのは確かだ。けどちらりと見ると大橋はぎゅっと目を閉じて酷く怯えた顔をしていた。

もしかして、本当は処女なんじゃ……？

人とかけ離れた大橋に『処女』という表現が当てはまるのかどうかは判らないが、少なくとも男慣れはしていないように見える。わざとらしい演技をする余裕もないところを見ると、本当に怯えているのだろう。

この場合は焦らずゆっくりと、かな。

僕は何度か首の付け根にキスをしつつ、優しく大橋の背を撫でた。制服越しに撫でた大橋の背が時々、ぶるりと震えるのがはっきりと伝わってくる。

「あっ！」

何度目かに背を撫でた時、大橋が小さく喘いで僕の胸に顔を埋めて抱きついてきた。妖艶な演技ではなく、可愛いこの反応は多分、大橋の地なのだろう。

でもこんな反応をしても膣の動きは全く変わっていない。多分、スイッチである乳首を弄らないと動きは止まらないのだろう。僕は、大橋の背や肩を優しく撫でながら、そっと耳許に囁いてみた。

「怖い？」

すると大橋はこくと頷いて顔を上げた。

「有田くん、もしかして、ずっと、私の事見てたの？」

辛そうな表情で大橋が問う。僕は微かに笑って大橋の頭を撫でた。

「見ていたよ。こんな風に大胆に迫られたのは初めてだからね。どうしてなんだろうって考えてた」

例えば大橋が僕を好きだというなら、告白すれば済む話だ。確かに僕は基本的に校内では付きあわないことにしている。だからもし告白されたら付き合えないと返答しただろう。でも普通はそういう手順を踏んでからこうなるのではないだろうか。

大橋の態度は普通とは全く違っていた。いきなり部屋に呼んで僕を押し倒したのだ。それだけでもかなりリスクの高い行為だ。

大橋は僕の返事に戸惑っているのか、困惑

した表情で僕を見つめている。僕が黙ると急に部屋は静まり返った。静かになるとよく判る。大橋の下腹部からは異音混じりのモーター音が響いている。そこでようやく大橋も音に気付いたらしい。身体を浮かせて乳首をつまむ。

「ストップ」

僕は乳首をつまんだ大橋の手をつかんで止めた。大橋は驚いた顔をしたが、僕には逆らわず、大人しく胸から手を離した。

「折角だから脱いでみせてよ」

こんなことになっているんだから、もう隠すものなんてないよね。僕はそう続けて大橋の反応を待った。それまで困惑した表情をしていた大橋が、視線をあちこちに彷徨わせる。

「見ても、がっかりするだけだと思うわ」

囁くような小声でそう言い、大橋が辛そう

に顔を歪ませる。

これはかなりのコンプレックスを抱いているようだ。そのことを知って僕はとても楽しくなった。身体が僕の心地良い気分につながったのか、振動する膣の中でペニスがびくんと震える。ペニスの反応に気付いたのか、大橋がびくっと身を竦める。

「いいから脱いでよ。僕がどう思うかは僕の勝手でしょ？」

薄く笑ってそう言うと、大橋は辛そうに顔を歪めたまま身体を起こした。どうやら逃げる気はなさそうだ。こくん、と頷くとブレザーの制服のボタンに手を掛ける。人前で脱ぐのは初めてなのだろう。その動きは焦れたいほどにゆっくりだ。

ブレザーの上着が白いブラウスの肩を滑り落ちる。僕はその様をじっと観察していた。ブレザーの上からでもはっきりと見て取れた乳首の様子が、ブラウス越しだとさらによく



見える。ブラウスの胸の部分には丸い突起が二つ、はっきりと浮いていた。しかもブラウスを内側から押し上げている突起は左右が全く同じ形で、しかも乳首の中央の部分が不自然に尖っている。

「ペンみたいなんだね。君の乳首って」

そう僕が感想を言うと大橋の顔がさっと朱に染まった。それを見て僕はふうん、と呟いた。顔色はこんな風に変わるんだ、と変に感心してしまう。てっきり色は変化しないのだと思っていた。

「ブラウスも脱ぐわね」

諦めと羞恥の入り交じった表情で大橋が言う。けれど僕はそれに待ったを掛けた。

「先にこの靴下を脱いでくれないかな？」

僕はくすりと笑って大橋の膝をスカート越しに撫でた。びくんっ、と震えた大橋が曲げ

ていた膝を少し伸ばして靴下を取る。現れたのは傷ひとつない綺麗な素足だった。爪先も綺麗に整えられているし、見た目は完璧とも言える。僕は無遠慮に大橋の足の甲を撫でた。

～立ち読み版はここまでです～